

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	自己の生き方を考えさせる新たな教育活動の開発について：総合的な探究の時間の手法を取り入れた教育活動成果
別タイトル	About newly designed educational activities that make the students think about their life : The results of educational activities based on a method of a period of integrated study.
作成者（著者）	押尾, 勲
公開者	東邦大学教員養成課程
発行日	2020.03.31
ISSN	24358290
掲載情報	東邦大学教職教育研究. 2. p.39 44.
資料種別	紀要論文
内容記述	研究論文
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD29097274">https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD29097274</a>

## 自己の生き方を考えさせる新たな教育活動の開発について

—総合的な探究の時間の手法を取り入れた教育活動成果—

### About newly designed educational activities that make the students think about their life

-The results of educational activities based on a method of a period of integrated study.-

押尾 勲\*

Isao Oshio

#### Summary

A team was made consisting of the students at T High School who wished to enter the medical school, beginning from 2016. This team was called Team Medical (from here after, referred to as TM).

Under friendly rivalry, the dreams of the students belonging to TM were helped come true by designing new educational activities (from here after, called TM programs). The TM programs were designed starting from the students' first year (at T High School)

TM programs were planned based on the goal and teaching objectives of the period of integrated study.

Students who attended TM programs understood their aptitude as the programs progressed, and the students decided their direction of life on their own initiative through activities with other TM members.

Students tended to endeavor hard to realize their dreams. TM programs may be able to be applied to the course guidance of students thinking about other courses.

#### 要 旨

2016年度からT高では、医学部医学科進学を希望する生徒でチーム {チームメディカル (TM) と称する} を構成し、切磋琢磨しながら希望の実現を図るという新たな教育活動を開発している。そのプログラムの開発に当初より関わってきている。プログラムの開発は、総合的な学習の時間の目標と指導主旨を踏まえて設計にあたった。本プログラムに参加した生徒たちは、プログラムの進行過程で自己の適性を計り、夢を同じくする仲間たちとの活動をとおして主体的に進路を決定し、その実現に向かって懸命に努力する傾向が見られた。このプログラム構成を多様な進路の方向性を持つ生徒の進路指導に展開することで、生徒一人一人の主体的な進路決定に応用できるものと考えられる。

---

\* 東邦大学理学部教職課程 非常勤講師

Toho University Faculty of science Teacher training programs Part-time lecturer

はじめに

2016年度からT高校で医師を目指す生徒達がチーム「チームメディカル (TM)」と称する)を形成し、切磋琢磨しながら医学部医学科進学に取り組みさせるという試みをはじめた。

本プログラムの特色は、(1) 職業理解と自己適性把握に有効と検証されている体験活動<sup>\*1</sup>と総合的な学習の時間の目標と指導方法を踏まえた探究的調査活動の手法<sup>\*2\*3</sup>を組み合わせ、医師の職責について深い理解と医科学分野への自己の適性を掴ませ、医科学分野への進学意識を一層高めること。さらに、(2) 自校教員による教科指導だけでなく、外部の教育機関が開発した多量のデータベースを活用したネット学習を組み合わせ、自己実現を達成するために必要な学力育成を効率良く高める仕組みを組み込みこむという大きな2本柱で構成されている(図1)。また、TM活動への参加については学力選抜を用いず、①なぜ医師になりたいのか。②医師に何をしたいのか。③毎日の学習時間確保をどの

ようにおこなうのかという3点を確認し、25名以内をTMに参加させている。TM生には、勉強だけでなく、部活動、委員会活動等、学校の全教育活動に全力で取り組ませるという「バランス」と「やりきる姿勢」を求め、全人的な発達を促している。

今回のプログラムで重視した点は、まずは自己の適性を考えさせることにある。①医師のやりがいと職責を生徒に理解させるために、将来のロールモデルである医師や医科学分野の研究者を計画的に学校に招聘した。講師達が、高校時代・医学校時代・医師のやりがい・現在の専門分野についての講話を繰り返し行った。②国・私立大学医学部医学科で医療体験活動を行った。医学科の教授等の講義聴講と医学生実習体験活動(模擬採血や気管支挿管の手技実習、様々な病態の聴診、腹腔鏡手術の模擬体験、内視鏡操作等体験や病理医の職務見学)を体験することで、医学部教育の実態を体験的に理解させた。③公立病院の施設見学を実施し医師の職場を知らせた。手術の見学、感染症防護服を着用しての

図1 チームメディカル活動の変遷

プログラム	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成31年度(予定)
4月	●ガイダンス → 第1年のTM参加決定 ●データベースでの学習習慣確立指導 →6月ネットを利用した学習習慣確立指導 →部活動へ移行	●ガイダンス → 第1年のTM参加決定 ●データベースを利用した学習習慣確立指導 ●ネットを利用した個別の学習支援 ●社会人基礎力養成研修	●ガイダンス(新入生) → 第1年のTM参加決定 ●ネットを利用した学習習慣確立指導 ●ネットを利用した個別の学習支援 ●第1回学習習慣調査(高1・高2)と分析(高3) ●第1回社会人基礎力養成研修(第1回)	●ガイダンス(新入生) ●データベースを利用した学習習慣確立指導 ●ネットを利用した個別の学習支援 ●学習習慣調査(高2・高3) 新入生実習可
5月	●臨床医講演会 ●医学系予備校講演会 ●第1回個人面談	●臨床医講演会 ●医学系予備校講演会(高1・高2・高3) ●第1回学習習慣調査(高1・高2・高3) ●第1回個人面談 ●小論文指導開始	●臨床医講演会 ●医学系予備校講演会 →高1・高2向け学習習慣調査+医学部受験講座 →高3向け学習習慣調査+個別ポイント講義 ●第1回個人面談 ●小論文指導開始	●第1年のTM参加決定 ●医学系予備校講演会 →医学部受験講座(1回指導) →高3向け学習習慣調査+個別ポイント講義 ●第1回個人面談 ●第1回個人面談 ●小論文指導開始
6月	●研究医講演会 ●小論文指導開始 ●TM論文指導開始 ●ネットを利用した学習習慣確立指導	●学方調査分析会(高1・高2・高3) ●臨床・研究医講演会 ●TM論文指導開始	●国立・私立大学医学部医学科入試担当者講演会 ●TM論文指導開始	●第1回社会人基礎力養成研修(第1回) ●学方調査分析(高1回) ●国立・私立大学医学部医学科入試担当者講演会 ●TM論文指導開始
7月	●大学・病院・研究所での体験研修	●大学・病院・研究所での体験研修	●大学・病院・研究所での体験研修 ●医学系予備校講演会(高3)	●大学・病院・研究所での体験研修 ●医学系予備校講演会(高3)
8月	●大学・病院・研究所での体験研修	●大学・病院・研究所での体験研修	●大学・病院・研究所での体験研修	●大学・病院・研究所での体験研修 ●医科大会説明会
9月	●論文指導(ゼミ単位発表を含む) ●史料大説明会 ●第2回個人面談	●論文指導(ゼミ単位発表を含む) ●史料大説明会 ●第2回個人面談 ●第2回学習習慣調査(高1・高2)	●論文指導(ゼミ単位発表を含む) ●第2回社会人基礎力養成研修(第2回) ●医科大会説明会 ●第2回個人面談 ●第2回学習習慣調査(高1・高2)	●論文指導(ゼミ単位発表を含む) ●第2回社会人基礎力養成研修(第2回) ●第2回個人面談 ●第2回学習習慣調査(高1・高2)
10月	●研究医講演会 ●論文発表文化指導(高2)	●研究医講演会 ●論文発表文化指導(高2) ●第2回学習習慣調査分析(高1・高2) ●学習習慣調査に基づく資料提供交流会(英語、国語) ●TM論文完成	●研究医講演会 ●第2回学習習慣調査分析(高1・高2) ●論文発表文化指導(高2) ●TM論文完成	●研究医講演会 ●第2回学習習慣調査分析(高1・高2) ●論文発表文化指導(高2) ●TM論文完成
11月	●TM論文完成	●学習習慣調査に基づく資料提供交流会(数学) ●医学系予備校講演会(高1・高2・高3) ●TM論文完成(発表)	●学習習慣調査に基づく資料提供交流会(数科) ●TM論文完成(発表)	●学習習慣調査に基づく資料提供交流会への個別指導 ●TM論文完成(発表)
12月	●医学系予備校講演会 ●研究医講演会	●研究医講演会 ●マツダ賞指導・面接指導(高3)	●医学系予備校講演会(高3) ●研究医講演会	●医学系予備校講演会(高3) ●研究医講演会
1月	●研究医講演会 ●第2回個人面談 ●マツダ賞指導・面接指導	●研究医講演会 ●マツダ賞指導・面接指導(高3)	●研究医講演会 ●マツダ賞指導・面接指導(高3)	●研究医講演会 ●マツダ賞指導・面接指導(高3)
2月	●医学系予備校講演会 ●社会人基礎力養成研修 ●TM論文発表準備会開催	●第3回個人面談(高1・高2) ●TM論文発表準備会 ●個別指導(高3)	●第3回個人面談(高1・高2) ●TM論文発表準備会 ●第3回社会人基礎力養成研修 ●個別指導(高3)	●第3回個人面談(高1・高2) ●TM論文発表準備会 ●第3回社会人基礎力養成研修 ●個別指導(高3)
3月	●保護者会 ●特別支援学校訪問 ●医学部受験準備会との交流会	●保護者会(高1高2対象) ●ハンセン病和歌訪問 ●医学部医学科合格者との交流会 ●第1回学習習慣調査(高2) ●ガイダンス(在校生)	●保護者会(高1・高2) ●医学部医学科合格者との交流会 ●医療展覧会(予定) ●第1回学習習慣調査(高1・高2)	●保護者会(高1・高2) ●医学部医学科合格者との交流会 ●医療展覧会(予定) ●第1回学習習慣調査(高1・高2)

開発したプログラム内容とその変遷過程について(図1)

医療行為体験、研修医との懇談から、医師の現状を理解させた。これらの体験を踏まえた上で、④ゼミ担当者の助言を受けながら医科学分野で興味関心のあるテーマ模索させ、自ら研究課題を設定させた。その課題を解決するための調査研究方法も考えさせ、約半年間の探究的調査活動の結果、論文という形にまとめさせた。医学系体験活動と論文作成は同時に進行しているため、論文の考察を深めさせる機会となった。さらに論文の結論を一般人が聴講する研究発表で発表させることで、コミュニケーション力と自己肯定感を高めることにした。高1から高2生までの2年間で、2回の探究的調査活動を体験させることで、課題設定力、調査・探究力、表現力等の向上に努めた。また、高2生全員には、論文要旨の英文化を課し、広く自らの意見を発信する能力の向上も行った。⑤NPO法人と連携し、社会人基礎力とコミュニケーション能力向上研修も組み込んだ。平成28年度は、年度末に1回実施し一体感形成に効果を得た。TM生の一体感と協同意識を形成するには、年度当初が良いとの反省を踏まえ、平成29年度は、4月に実施した。今後、TM生が順次増加することを考えると学年を超えての生徒間交流が希薄化する危惧を感じた。そのため、平成30年度より、年間3回コミュニケーション向上と社会人基礎力醸成の研修を組み込んだ。チーム力を上げる技術を身に付けさせ、チームで最高のパフォーマンスを発揮するためのふるまいを習得させている。⑥また、患者が求める医師像を意識させるために患者目線の体験を年度末に組み組み込んだ。病院内学級訪問やハンセン病施設見学を行い、担当教員や施設の医師との懇談をとおして、患者にとって、どのような医師になるべきかを考えさせた。

TMの活動は、概ね月1回から2回のペースで実施している。その理由は、生徒の学習、部活動、委員会活動、SSH活動等への参

加を無理なく行えるようにするためである。また、大学、研究施設、病院等の1日から半日の時間設定で行われる体験活動は、長期休業期間中に設定することで参加しやすくした。さらに、大学・研究施設と病院の体験活動は、医師として様々な活躍場があることを知らせるために、高校1年生と高校2年の2年間で、大学・研究所と病院を必ず体験するように指示している。

次に重視した点は学力の涵養と医学科入試の突破力である。そのための学習支援策として、①2016年度より国語科が、小論文対策をTM活動に組み込むことを提案した。また、同年度は、予備校との連携で、国語、数学、英語、理科で予備校講師による授業見学と意見交流会を実施し、本校教員が医学部入試問題の分析等を行い教科指導力の向上を図った。しかし、TMにはT校の様々な学習到達レベルの生徒が集まっていた。その生徒達をいかにしてより高い学習到達レベルに引き上げるかとの視点から、②2017年度より、TM生の正確な学力レベルを定点観察することにした。この結果から生徒の課題と教員の課題を把握し、生徒の個別学習支援に加え、各教科の授業改善に結びつける手法に変更した。春と秋の年2回、TM生には基礎学力の定着状況と学習到達レベルを把握させるための外部模擬試験を実施した。外部教育機関の専門家にTM生の学習到達度の分析を依頼し、分析結果は教科会等で報告し予備校とT高教員との間で意見交流を行いT高校の授業改善を図った。また、TM生には外部模擬試験の返却に合わせて、勉強方法の講話を模擬試験実施教育機関に依頼して行った。さらに、個人の学習到達分析から、一人一人の弱点を克服するための個人別推奨問題と動画配信を、年間をとおして行った。ネット配信によって、TM生はいつでもどこでも学習が可能になった。生徒には、学校等での授業に加え、選択的で効率的な自主学習が進められる環境をつ



表2 TM生と非TM生の医学部医学科進学に向けた傾向比較

1 9月時点で医学部医学科進学を希望した生徒が翌年の2月に医学部医学科を受験した割合について			
	平成28年度	平成29年度	平成30年度
TM活動への参加生徒 (TM生)	66.70%	100%	100%
TM活動に不参加の生徒 (非TM生)	83.30%	75%	60%
生徒数	TM生 6名⇒4名 非TM生 6名⇒5名	TM生 5名⇒5名 非TM生 12名⇒9名	TM生 10名⇒10名 非TM生 10名⇒6名
2 現役医学部医学科合格者の年度変化について			
	平成28年度	平成29年度	平成30年度
TM生	25%	40%	今後収集
非TM生	20%	22.20%	今後収集
生徒数	TM生 4名⇒1名 非TM生 5名⇒2名	TM生 5名⇒2名 非TM生 9名⇒2名	TM生 10名⇒ 非TM生 6名⇒
3 医学部医学科進学達成率(既卒1年目)について			
	平成28年度	平成29年度	平成30年度
TM生	100%	今後収集	今後収集
非TM生	50%	今後収集	今後収集
生徒数	TM生 3名⇒3名 非TM生 4名⇒2名	TM生 3名⇒ 非TM生(7)名⇒ 名	

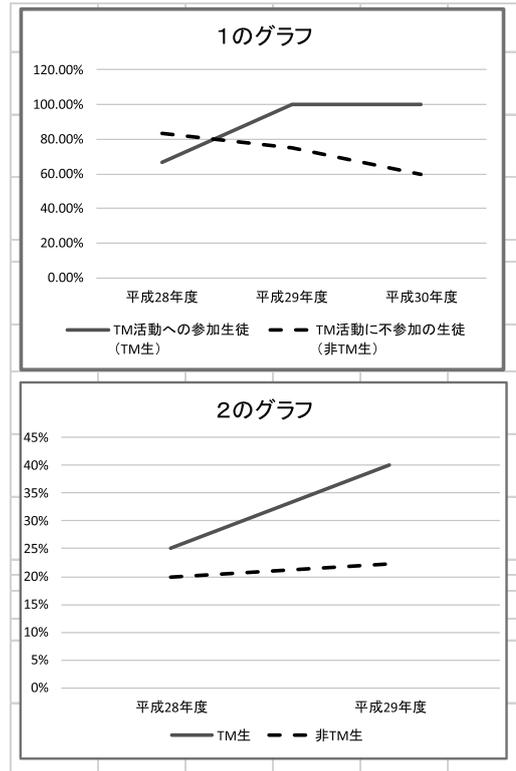


表3 医学部医学科進学推移 (国立大学、防衛医科大学、私学東京枠のみデータ)  
●平成28年度からチームメディカルを開始 (平成31年3月12日現在)

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
国公立大医学部	0	1	2	1	3	5
防衛医科大	0	1	0	1	0	0
私立東京枠	0	0	0	0	1	0
現役合格者数	0	2	2	2	4	5
既卒国公立大学医学部	4	4	3	3	4	9
既卒防衛医科大	0	1	0	0	1	1
既卒私立東京枠	0	0	0	0	1	0
国公立・私立東京枠 合格者推移	4	7	5	5	10	15

も多くのTM生に、学習努力に対する肯定感を感じさせることができる可能性もある。

医学部医学科への受験状況を見ると、TM生は、TMに所属しなかった生徒と比較して、受験まで気持ちのブレがない。これは医師になるという気持ちの強さが高まっている傾向があると言える (表2-1)。その気持ちの強さから現役での医学部医学科合格率もTMに所属しなかった生徒と比較して高い傾向がある (表2-2)。医師になるという強い気持ちがたとえ1年目で実現できなくても、気持

ちの維持が継続し、次の年での実現に繋がっている。強い志形成が、進路実現に影響を与えていると考えられる (表2-3)。

最後に、医師になりたいと希望した生徒達の気持ちを一層高めるキャリア教育と主体性を喚起する学習支援策を組み込んだ無理のないプログラムを展開してきた。自分の就きたい職業の職務内容を十分に理解し、かつ、自らの適性も勘案した上で進路方向を決定すると、主体的に進路実現に向けた努力が促されるとい傾向が得られた (表3)。

今回、チームメディカル用に開発したプログラムは、①キャリア教育、②探究的な調査活動、③学習支援の組み合わせで構成されたプログラムである。生徒が学校生活を無理なく過ごせるように、T高校では、概ね月1回～2回程度の活動に抑えている。この①から③の構成比重を、学校の実態に合わせて考案、実施することによって、広く一般の高校でも生徒の生き方を考えさせる教育に有効に働くプログラムになると考えられる。TMの活動は、開始して3年目である。今後も継続してデータを集め、より精度の高い構成比重に磨きあげて行きたい。

#### 参考文献

- \* 1 生徒指導・進路指導論 ガイダンスとキャリア教育の理論と実践 図書文化  
吉田 達夫 2006年
- \* 2 今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開 総合的な学習の時間を核とした課題発見、解決能力、論理的思考力、コミュニケーション能力等向上に関する指導資料 文部科学省  
2013年
- \* 3 「探究」を探究する 本気で取り組む高校の探究 高校教育12月増刊号 学事出版 探究のスパイラルで磨くライフワークプロジェクト pp136-143  
田村 学、廣瀬志保 編著 2017年

本論文は、第24回日本教育公務員弘済会日弘教教育賞奨励賞を受賞したものを主催者の了承を得て掲載するものである。